

III. 研究開発Ⅱ 教科：アクティブラーニング

1. 教科：アクティブラーニングの概要

（1）本校 SGH におけるアクティブラーニング

「アクティブラーニング」という用語は、現在では、学習指導要領の文言に従って「主体的・対話的で深い学び」と称されることが多くなっている。本校では、「アクティブラーニング」を、溝上慎一氏(学校法人桐蔭学園理事長)の「一方的な知識伝達型講義を聞くという(受動的)学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与、そこで生じる認知のプロセスの外化を伴う」という定義をもとにして、それらの能動的行為を通じて知識の再構築を進め、主体的に学び続ける力につなげる学習活動と捉えてきた。そしてこの5年間、各教科でディベート、グループワーク、ペアワーク、パネルディスカッション、反転学習などの手法を取り入れ、加えてICTの活用やループリック評価も導入しつつ、アクティブラーニングの実践を試行してきた。「アクティブラーニング」と呼ぶか、「主体的・対話的で深い学び」と呼ぶかは、呼称の差異に過ぎず、本校において、SGHの課題研究と教科学習の往還によって実践してきたことは、次期学習指導要領の目指すところを先取りするものであったと考えられる。

（2）本年度の取り組み

これまでの各教科におけるアクティブラーニングの実践研究をもとに引き続いて、本校 SGH で目指す4つの力(課題解決力・コミュニケーション力・多文化理解力・セルフマネジメント力)との関連を整理し、課題研究に活かす教科学習の実践を行った。教科学習には独自の特性があり、すべての学習を SGH に結びつけることはできないが、アクティブラーニングの観点から4つの力と関連づけることで、SGH の研究主題の達成につなげようと試みた。特に、根拠を明確にしつつ論拠を踏まえて結論を導く、いわゆる三角ロジックの発想を教科学習の随所に取り入れ、説得力をもって他者に効果的に伝えることに重点を置いた。教科学習においても課題研究に資する学習活動を取り入れることによって、教科学習と課題研究を有機的に結びつけ、全校を挙げて所期の目的の達成を目指した。

（3）今後の課題

教科ごとにアクティブラーニングの実践研究が積み重ねられてきたが、現時点では単元レベルにとどまっており、SGH の課題研究と同様に、教科の年間カリキュラムづくりが必要である。また、教科ごとの枠を脱する実践も今後ますます充実させる必要があり、探究的な学習をさらに充実させるためには、教科横断的な発想で全校的に推進していく必要がある。ICT の活用やループリック評価もかなり導入されてきたが、現状をよしとせず引き続き検討を続けていく必要がある。

2. 各教科の実践報告

「国語」

1. 4つの力との関連

国語科では、言語活動を充実させるため、主体的・対話的な深い学びの実践を行っている。国語科の授業は、授業者の質問に対して生徒が自分の考えをまとめそれを説明するという点において常に「コミュニケーション力」が求められる。また、評論文や文学的文章の読解、古典分野の理解においては「多文化理解力」が求められる。これに加えて、話し合いやディベートなどの授業を行うことによって、「課題解決力」「セルフマネジメント力」の力をつけることを目指している。

2. 課題研究との関係

これからの中高生には文章を読み解く力、論理的に思考し表現する力、互いの立場や考えを尊重しながら自らの意見を伝える力を育成することが求められる。また SGH の課題研究においても、これらの力が求められる。すなわち、現状を把握し課題を見つけるためには、様々な資料を探して、それを読み解く力が必要になる。また、課題研究の結果を発表する際には、自分達の考えを文章化してポスターにまとめなければならない。口頭発表の際にも、聞き手に自分達の研究内容がしっかりと伝わるような説明が求められる。最後に論文として文章化する際には、文章の構成力、表現力などが必要である。国語科では、普段の授業を通じてこれらの力が身につくことを目指した。まず、小テストを行うことで漢字・語彙力・文法力などの基礎的言語事項を定着させ、授業において一つの文章を深く読むことで読み解力を身につけさせる、意見文や小論文を書かせることで文章表現力をつける、グループでの話し合いやディベートを行うことで、互いの立場や考えを理解しながら自らの意見を発信する力をつける、という様々な形式の授業を組み合わせることで、課題研究へと繋がる力の育成を図った。

3. 本年度の取り組み

(1) 1年現代文 朝日新聞社講師による「新聞読み方講座」、「声欄投書シート」の作成

SGH の課題研究では、様々な種類の資料を読み解くことが必要になってくる。そこで、生活の中の文章を読む機会として朝日新聞社から講師を招き、「新聞読み方講座」を開催した。新聞の紙面構成について説明を受け、新聞というメディアの特徴や読み方のポイントを学んだ後、当日の新聞から自分が気になった記事を選び、その記事に対する自分の意見をグループ内で発表し、共有するという授業を行った。また、書く機会を設定し文章力を伸ばすために、夏休みの宿題として朝日新聞の「声欄投書シート」を作成させた。自分の関心のあるテーマで 500 字程度の意見文を書かせ、全員分を投稿した結果、女子 2 名の原稿が新聞に掲載された。

(2) 1年現代文「なりたい大人作文コンクール」応募作品の作成

論文やレポートの書き方の基本を学び、よい文書の書き方について考える授業を行った。思考ツール・マンダラートを使って、「なりたい大人になるために」というテーマに合ったアイデアを出して、伝えたいことを絞った後、プリントを使って主張・理由・具体例を整理し、内容が的確に伝わるタイトルをつけて、400 字の意見文にまとめさせた。完成後、5 人のクラスメートと文章を読み合い、改善点について考えさせ、推敲した作品を投稿した。

(3) 2年現代文「全国高校生読書体験記コンクール」応募作品の作成

読書をする機会を増やし、また読書によって自分が受けた影響を考えて文章にする力をつける

ため、夏休みの課題として2000字の作品を書かせた。全員分の中から5名の作品を選び投稿した。

(4) 1年現代文 教科書教材『時間をめぐる衝突』ワールドカフェセッション

話し合いを通して、発信力、コミュニケーション力を高め、教材のテーマについて考えを深める授業を行った。筆者が問題提起していた「人の営みと時間との関係」について、ワールドカフェセッションで意見交換した。振り返りシートでは、上手な話し方・聞き方や意見交換の方法など、よりよい話し合いのあり方について考えさせた。

(5) 2年現代文 教科書教材『山月記』二つの文章の比較・話し合い

二つの資料を比較しその違いを指摘することから、筆者の意図を考えさせる授業を行った。教科書の『山月記』の文章と、その作品のもとになった文章『人虎伝』を比較し、筆者が『人虎伝』をどのように色づけし、『山月記』でどのようなことを表現しようとしたかをグループで考えさせた。それぞれの文章を比較検討するところは個人で行い、グループ内で自分の見解を説明し、グループで話し合いながらそれぞれの見解を一つにまとめ、クラスで発表させた。

(6) 1年現代文 教科書教材『羅生門』ディベート

グループでの討論を通して、論理的思考力、プレゼンテーション力、発信力、コミュニケーション力を高め、多面的なものの見方を身につけるため、ディベートを行った。授業で教科書の本文の読解を終えた後、「下人の行為は許される」というテーマで、3人ずつ肯定側・否定側に分かれてディベートラウンドを行った。進行・判定も生徒自身で行った。



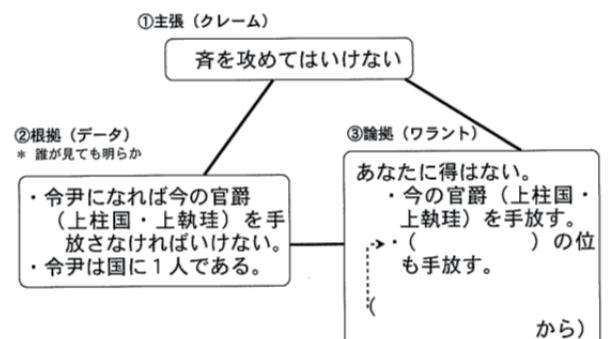
(7) 1年古典

直近の総合の授業で「三角ロジック」による論の立て方を学習したので、その技法を漢文の読解場面で活用させてみた。また、ともすれば学習者の実生活と乖離しがちな漢文の世界を身近に感じさせる効果も期待したことである。

「蛇足」の喻え話の裏にある論理を読み解いて三角ロジックの論理に置き換え、三角ロジックの技法に慣れさせるとともに、実践場面での有用性を理解させた。さらに、定期考査の問題では「株を守る」の元になった故事を使って、筆者の論理を「根拠」「論拠」「主張」として簡潔にまとめる問題を出題して評価に活かした。

「蛇足」補助プリント

陳軫が昭陽を説得するために用いた三角ロジック



4. 成果と課題

漢字・語彙・文法などの基礎的事項の習得は個人で行うべきところが大きく、文章読解力も今までの読書量や個人的体験などの様々な要因により個人差が大きい。いわゆるアクティブラーニング型の授業は、グループで同じ課題を話し合うことにより、自分にはない視点や考え方を学ぶことができ、集団として学びに向かう態度を醸成する効果がある。課題発表やディベート形式の授業は生徒には概ね好意的に受け入れられ、積極的に自分の意見を述べる様子が見られる。

とは言え基礎的学力がある層はさらに思考力・判断力・表現力がついている反面、基礎的学力に問題がある層は表面的な理解に終わってしまっているように見受けられる。学習に積極的でない層に、主体的に国語力をつける努力をさせるための工夫が、今後考えていかなければならない課題である。

「地歴・公民」

1. 4つの力との関連

今年度は紙幅の関係で世界史の取り組みを紹介する。普段の授業から「多文化理解力」の育成を意識しているが、報告する取り組みは、4つの力のうち、特に「課題解決力」、「コミュニケーション力」の育成に力点を置いたものである。

2. 課題研究との関連

歴史授業において、史資料の活用は重要な役割をもつ。しかしその史資料は、あくまで教員側の普段の教材研究から必要と判断したものを、授業の中で一方的に提示して、生徒に短時間の読解を強いることが多い。つまり生徒がもつその単元での関心と乖離している場合がある。一方、教員は、普段の教材研究において、史資料の性格を読み解き、考証する。またその中で生み出された疑問に対して、違う史資料で論理的に読み解いていく。教員が行っているこの教材研究こそが、興味深くその単元を追究している場面と考えた。そこで、この部分を生徒に実践させることができ、その単元で生徒の持つ関心にあった内容を主体的に探究させることに繋がるのではないかと考え、授業を計画した。

また、これらを助けるツールとして「平野メソッド」でも取り上げている「三角ロジック」を用いて道筋の通った理解・論理展開がなされるように、また「ジグソー法」を使い「コミュニケーション力」の育成に寄与するように心がけた。

3. 本年度の取り組み

世界史A（第2学年）における実践、「イタリアの統一運動… イタリア統一の3傑（カヴール・ガリバルディ・マッティーニ）の考察から、最も優れた功績を探る」を紹介する。

（1）授業の概要

授業は計2時間で計画した。また、生徒が調べる時間を十分に確保したかったので、授業外での活動を促した。以下、授業の流れと時間配分を示す。

a 1限目

- ①アイスブレイクを兼ねて、班分けをした。6班に分けるため、世界史Aの既習範囲で解答が1~6となる、異なる問題カードをランダムに全生徒に1枚ずつ配布し、解答させた。その解答の数字で班を構成した。（5分）
- ②授業の導入として、ウィーン体制後のイタリアが、複数の国に分裂していたことを、図を用いて説明した。そして3人の活躍で統一されたことだけを説明した。（5分）
- ③各班で代表を決めた後、3人のうち誰について調べるか話し合わせ、クラスで1人の人物につき2班ずつが調べるように決めさせた。（5分）
- ④「三角ロジック」の説明を簡単に行い、決定した人物のイタリア統一のための最大の功績について、班で考察させた。（30分）調べが論理的に展開されているか確認できるように、この段階で評価表（評価基準）を示した。ただし、班の結論は、次の授業までの課題とした。



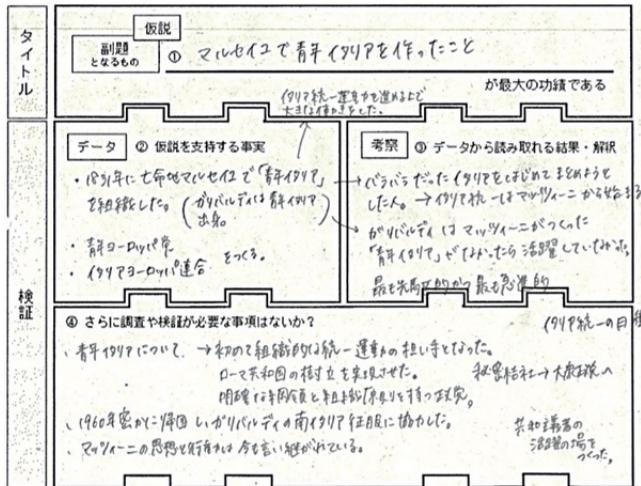
図III-1 授業の様子①
(授業中のiPadの貸出し、携帯電話の閲覧、図書館の活用を認めた)

b 2限目

- ①前授業の班で、当初の課題を再検討したのち、班を「ジグソー法」で解体し、新たな班を構成し

た。1つの班に1人の人物についてのエキスパートが最低2名いるので、ペアとなり同一人物の調べてきた内容を共有させた。(10分)

- ②ペアでまとめた結論を、現在の班の生徒に説明させた。事前に示した評価基準によって相互評価させ、どの人物のどの部分が最大の功績か結論を出させた。(5分×3組)
- ③班で結論が出された人物についてホワイトボードにまとめ(5分)、代表がクラスで発表し、全体共有を行った。(18分(3分×6班))



図III-2 「三角ロジック」での成果物

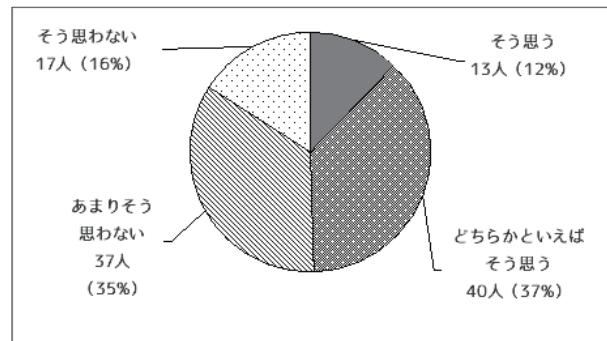


図III-3 授業の様子②

(2) 本実践の成果と課題

生徒は精力的に取り組んでいたが、事後のアンケート「今回のような課題解決型の授業形態が、普段の講義型授業より良いか」では、図III-4のような結果が得られた。結果によれば、49%が課題解決型の授業形態に肯定的な意見を示したが、51%が普段の講義型授業形態が良いと回答した。肯定的な意見としては、「普段読まない本に触れた。」や「総合的な学習の時間での三角ロジックを生かすことができた。」などの回答が得られた。一方で、否定的な意見としては「丁寧に正しく調べられているか不安だ。」や「テストに対応できるか不安だ。」などが見られた。

生徒の成果物から、総合的な学習の時間での「三角ロジック」が生徒に定着しており、このツールが他の授業でも生かすことが可能である。しかし今回の目的の一つであった、考証という点では物足りなさを感じた。教科的な深い学びとするためには、高次元な「きっかけ」や「問い合わせ」を再考・修正することが必要である。



図III-4 アンケート結果 (107人回答)

4. 成果と課題

生徒の育てたい力に焦点をあて、授業の形態の特性に応じて、今後も授業を企画していきたい。また、その育てたい力に応じて、考証の形態・評価法も合せて変えていかなければならない。

「数学」

1. 4つの力との関連

数学を学ぶ意義は、数学的な見方や考え方のよさを認識し、将来の学習や生活に数学を積極的に活用する態度を身に付けるとともに、知的好奇心、豊かな感性、健全な判断力、直観力、洞察力、論理的思考力、想像力、根気強く考え続ける力などの創造性の基礎を養うことがある。これらを念頭に本校数学科では SGH で重点的に育成を目指す「4つの力」のうち「課題解決力」「コミュニケーション力」に焦点をあて、実践を行っている。

2. 課題研究との連携

「現状把握」、「研究目的」、「研究方法」、「研究結果」を意識させることは課題研究を行う上で欠かせない。これらの項目は、数学の課題解決過程に照らし合わせると「与えられた条件は何か? (現状把握)」、「何のために解決するのか? (研究目的)」、「どうやって解くのか? (研究方法)」、「得られた結果は妥当か? (研究結果)」となり、数学を学習することで存分に鍛えることが可能である。

3. 本年度の取り組み

第1学年における実践を報告する。第1学年では、「三角関数」をテーマとして、問題演習にジグソー法を取り入れ、多面的思考力・論理的思考力、コミュニケーション力の育成を目指した。

a SGH の取り組みと授業のねらい

本校 SGH の取り組みの柱である課題研究と教科「数学」の学習内容が、相互に活かした授業を開拓することが重要である。数学科では、例えば、課題研究で課題を認識する力をつけても、数学では何が課題かが明確にできない、あるいは逆に、数学で論理的な思考を学んでも、それを課題研究に活かせない、というようなことがないよう、ともに課題解決力の育成を目指した授業を計画し、生徒にもそのことを常に意識させている。

課題研究では「いのち」を多面的にみるという観点から、他の研究領域の複数の生徒とディスカッションを行うジグソー法を取り入れている。そこでは、自分の行った研究を自分の言葉でわかりやすく相手に伝えることが求められる。また、もう一つの重要な要素として、課題研究はチームで行うということが挙げられる。

今回の授業においても、主体的・対話的で深い学びを意識しながら、ジグソー法を用いてチームで課題に取り組ませている。一つの研究チームとしてそれぞれが自分の役割に責任をもち、互いにコミュニケーションをとりながら、目標に向かって進んでいくことが重要である。本授業は、課題研究と授業では共通した資質能力が求められていることに気づくこと、互いの学びを様々な場面で活かすことができるようになることをねらいとして実施したものである。

b 授業の概要

本授業では、三角関数について一通り学習を終えた生徒に対して、その単元で学習した複数の知識を活用して解く課題を準備した。一つ一つの課題は易しい内容となっているが、事象の考察にそれらを活用できるかが重要である。知識の核となる本質的な部分をしっかりと理解し、それをどのような場面でも活用できる力を習得させることで、数学以外の部分でも活かせる課題解決力を養う。また、チームとして課題に取り組む際の個人の責任の重要性を生徒自身が感じたり、チームとして課題解決できることを経験することで、今後の生徒の成長へつなげていくよう指導したい。

授業の流れを以下に示す。

- ①アイスブレイクを兼ねてクジ引きで班分けをする。班分けに使用するクジには、答えが 1 ~ 6 となる数学の問題を書いておき、全員に配布して答えの班に移動させ 6 班に分ける。

②各班で役割分担（L・A～E）をする。Lはリーダー、A～Eは難易度別になっており担当者は各班で話し合って決める。

③それぞれの役割 A～E ごとに集まり、エキスパート活動を行う。役割 A～E の内容は以下の通り。

A : 直線の方程式 B : 2点間の距離 C : 2倍角の公式

D : 三角関数の合成 E : 三角関数の最大値

- ・担当の問題は、もとの班員に責任を持って説明できるように準備させる。
- ・役割 L の生徒には、この後のチャレンジ課題と A～E の課題をすべて見せ、班のまとめ役として、どのような方針で班のメンバーに理解させていくかを考えさせる。

④それぞれの班に戻って、エキスパート活動で理解した内容を班員に説明し共有する。

⑤班でチャレンジ課題を取り組む。

- ・ICT 機器を用いて、課題を視覚的にイメージさせる。
- ・役割 L の生徒には、役割 A～E の発表を上手く活かしながら班員全員が理解できるよう視野を広げ全体を見ながら進行していくよう指示をする。

⑥チャレンジ課題の解説をする。

- ・エキスパート活動をどう活かすのかを重点的に意識させる。

【生徒の感想（振り返りシートより）】

- ・後で説明しなければいけないと思って解くと、深く理解しなければと思って頑張ることができた。
- ・どういうことを考えて授業を受ければよいかわかりやすかった。
- ・人に説明するためには、ちゃんと要点を理解する必要があることがわかった。
- ・最初 A の問題を見たとき、数学が苦手な自分でも簡単に解けると思ったが、チャレンジ課題を解いていくなかで、その知識がこんな難問でも使うことに気づかされ、感動した。
- ・L になって不安だったけど、不都合なく活動を進められたのでほっとした。自分がしっかりとしなければという責任感をひしひしと感じた。

4. 成果と課題

本実践の成果として最も感じたことは、ジグソー法を導入したことによって、自分が役割を果たさないと課題解決できないという認識のなかで、ほとんどの生徒が懸命に取り組んだことである。特に、個々の生徒にあった課題を課すことができたことが、成果が得られた理由の一つであった。今回のエキスパート活動では難易度別としており、そのことが、数学を苦手とする生徒でも何とか理解し、責任を果たそうと懸命に取り組んだ成果につながった。数学の授業で行うグループワークなどでは、特定の生徒がすべてを解決させ、苦手とする生徒は何もできないという場面になりがちである。本授業では、数学得意とする生徒はリーダー役にしてまとめる立場とすることで、新たな課題を与えた。

数学という教科の特性上、得意な生徒とそうでない生徒の差が大きいことが課題になりがちであるが、この取り組みは、生徒全員が力をつけていくためにどのような授業が有効か考える機会となった。

今後の課題としては、このような時間のかかる授業を、どのようなバランスで効果的に組み入れていくかである。限られた時間でどのようにカリキュラムマネジメントしていくのかよく考えていかなければならぬ。

「理科」

1. 4つの力との関連

本校理科では、課題の発見から調査・研究、分析、報告・発表などを通して「課題解決力」を育成する授業を頻繁に行っている。また、学び合いやペアワーク、グループワーク、発表などの主体的・対話的で深い学びの取り組みを通して「コミュニケーション力」を高めている。

2. 課題研究との関係

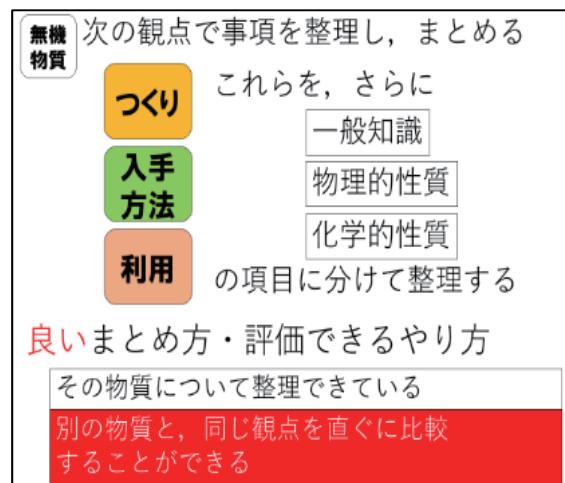
観察や実験の授業は、課題研究の流れ全体あるいはその一部を取り入れることによって成り立っている。日常的にジグソー法やペアワーク、グループワーク、QFT を導入することや、さまざまな形態の文章やポスターなどを書かせること、成果物を相互に評価させることなどで、本校の SGH の取り組みに必要なスキルが高まると考えている。

3. 本年度の取り組み

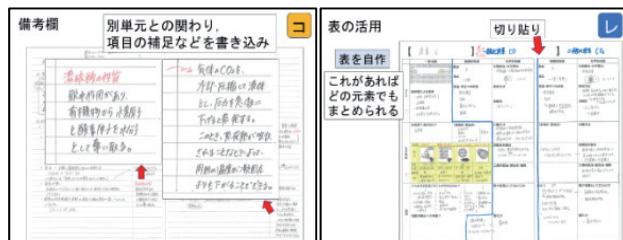
(1) 化学科

化学科では SGH4 期生(2年生)の授業にて「無機物質(非金属元素)」の単元を扱う際、生徒が主体的に学ぶ授業展開として「まとめノートづくり」を行い、情報を収集し、分析する力の育成をはかった。

一連の流れとしては、まず予習として穴埋め形式のプリントに取り組ませ、教科書に記載のある最低限の事項について確認させた。その後答え合わせをしてノートにまとめさせた。その際、図説やインターネットによって情報収集をさせたが、整理する観点を示し、三つの観点から情報を整理するよう指示した(図III-5)。また、この単元の初めあたる「14族元素」の学習時に、レイアウト(見やすさ)とコンテンツ(内容)を両立の両立をはかるノートのまとめ方についていくつかの模範例を示し、生徒に考えさせた。



図III-5：授業で用いたスライドの一部



図III-6：まとめの実践例実践例

(2) 物理科

SGH 課題研究と教科指導の一体化を意識した授業実践を行っている。社会課題に対するデータ分析、問い合わせ、三角ロジックなど本校生徒になじみ深い「平野メソッド」の手法を援用し、理系・文系の垣根を越えて思考力・判断力・表現力を育成し、物理の知識を活用したアクションプランを考えるという授業を展開した。

時間配分	概要	備考
導入 10分	近年の大規模災害の中から、とくに停電を伴うものを取り上げる。台風、地震、洪水のいずれの場合にも停電が発生しうることが分かる。	個人の経験から家庭の防災対策を省みる
展開 30分	停電をエネルギーの流れと変換の関係図として捉え直す議論を通じて、日常生活の多くの場面でエネルギーに依存しており、現代ではそのほとんどが電気エネルギーであることを確認する。また戦後の消費電力の推移から、30年前と現在とで想定される災害被害の違いに気づく。	ペアワーク・グループワークの議論の中から発見させる。
まとめ 5分	防災対策に焦点を当てたとき、物理学で学ぶ種々の形態のエネルギーとその変換がもつ実践的な価値について理解を深める。	

(3) 生物科

生物科では、スマートフォンなどのカメラ機能を用いて、研究手法や考察する力を身につけることを目標とした授業を実践した。夏休みに、「スローモーションやタイムラプスを用いて生物の決定的瞬間をとらえる」という課題を出し、2学期最初の授業で発表と相互評価を行った。

表：相互評価に用いた評価項目

背景	聴衆に興味を持たせる工夫はあるか。
目的	観察・実験で得たいことは明確か。
方法	方法は、目的に到達するために適切か。 方法に再現性があるか。
結果	観察・実験で得られたデータは定量・定性的分析がされているか。 観察・実験から分かることのみを結果としているか。
考察	科学的見地に立って考察できているか。 目的に則した考察ができているか。

写真：生徒の発表スライド



4. 成果と課題

化学科の取り組みを行った当初は、膨大な量の情報をまとめることに不慣れな生徒や、情報を整理する作業の経験が少ない生徒がいたが、他者の成果物から発想を得て、次第に自分なりの方法を習得していった。また、主体的に情報に関わろうとすることで疑問や考察が生じ、化(科)学的な思考力を發揮する者も見られたことも成果である。今後、内容を深化させるための「きっかけ」を一層工夫していくことが課題である。

物理科の取り組みでは、従来の防災教育によって実際に多くの家庭で何らかの防災対策が行われていることが分かったが、その内容のほとんどは備蓄に依存し、既習事項であるエネルギーの観点を意識したものでないことが分かった。ローリングストック法をエネルギー備蓄にも応用した一連の課題発見・解決型学習によって、エネルギー変換の単元学習への意欲が高まるとともに、実際の行動変容にもつながる効果が見られた。

生物科の取り組みでは、授業を通して、日常・肉眼では観察できない新たな視点から課題を発見することや、自分なりに考察することの面白さと難しさを感じた生徒が増え、生物だけでなく、さまざまな事物の多角的観察についての真摯な態度を養うことができた。今後、相互評価を加えることによる評価の妥当性について検討していくことが課題である。

「保健体育」

1. 4つの力との関連

保健体育科では、保健分野、体育分野とともに主体的・協働的で深い学びの実現をめざして、多文化理解力、課題解決力、コミュニケーション力の3点を意識し、学習活動を展開している。その中でも今回は、サッカーの単元において、KJ法やロジックツリーなどの「思考ツール」を活用し、チーム戦略を深めた授業の実践事例を紹介する。

2. 課題研究との関連

KJ法を用いることで、個人やチームの課題を明確に認識し、整理することができるようとした。また、ロジックツリーを活用することで、課題の原因を踏まえた解決方法を考え出すことができるようにした。このように、課題を解決するためのプロセスを丁寧に学習することによって、自分たちで課題を解決する（クリアする）実感を得ることができるよう指導した。課題研究においても、このようなプロセスを丁寧に行うことで、課題解決が自分事になるようにすることが重要であり、本授業と共通している。

3. 本年度の取り組み

(1) 単元「チームで戦略をたてて楽しむサッカー」（全23時間、1年女子、48名と24名）

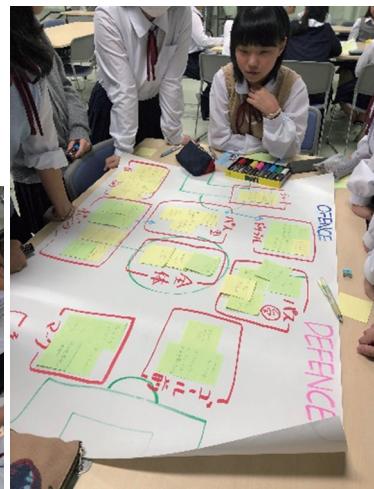
(2) 授業作りの視点

- ほとんどの生徒はサッカー経験が乏しく、課題が何であるか認識できない。そのため、導入にゲームの時間を多くとり、課題発見に必要な時間を確保する。
- 仲間と協力しながらチームプレイを楽しみたいと感じている生徒が多い。そのため、早い段階でチームを固定し、チームで課題を解決しゲームを楽しめるように工夫する。
- 「こうすればもっとサッカーを楽しめる」という具体的な課題を生徒たちが発見し、解決方法を考えることが出来るように、KJ法やロジックツリーを適宜活用して実施する。
- チーム内で役割分担することで、すべてのメンバーがチームのPDCAサイクルを回すことに関わり、全員の協力によってチーム力が高められるように工夫する。

(3) 学習のねらいと計画

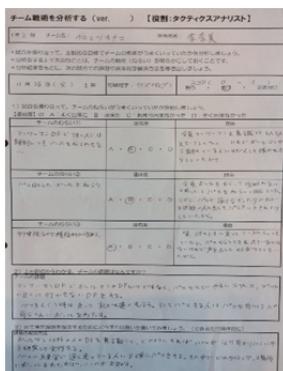
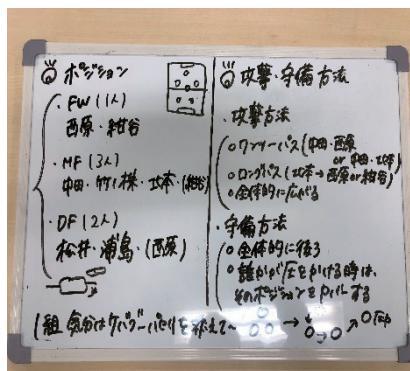
a 学習のねらい

- 今もっている力で十分にゲームを楽しむとともに、高まった力に応じてルールを工夫してゲームを楽しむ。
- 教室での活動でKJ法やロジックツリーなどの手法を用いることで現状認識を深め、課題を発見し、その解決方法を導き出す。
- チームで役割分担をして分析し、自チームや相手チームの特徴を知る。また、自チームや相手チームの特徴に合わせて練習方法や戦術を工夫してゲームを楽しむ。



b 学習の道すじ (全 23 時間)

はじめ	なか①	なか②	なか③	まとめ
1 2 3 4	5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16	17 18 19 20 21 22 23		
くわんい♪	くわんい♪	くわんい♪	くわんい♪	
今持っている力でボールを工夫してゲームを楽しむ	高まつた力で見てボールを工夫してゲームを楽しむ 戻り戻しを理解、練習方法やボーナルを工夫してゲームを楽しむ	さらに高まつた力で見てボールを工夫してゲームを楽しむ 自チームや相手チームの分析を踏まえ戦術や練習方法を工夫してゲームを楽しむ		
<学習1>	<学習2>	<学習3>	<学習4>	
○ ゲームより楽しむための課題を工夫する ・毎回違うメンバーでゲームを組み、異なる人同士でコートサイドによってゲームを楽しむ。 - 11時(10m×45m) - 7時(7.5m×30m) - 6時(40m×25m) - 6時(40m×25m)	○ サッカーをもっと楽しむために必要な課題解決の方法を考える。チームでボーナルを工夫する。 【グラウンドにおける活動】 - KJ法によって、チーム(個々)の抱えている課題を整理して課題達成を図る。 【教室での活動】 - KJ法によって、チーム(個々)の抱えている課題を整理して課題達成を図る。 - ロジックツリーによって、課題の範囲を踏まえた解決方法を導き出す。 - サッカーの攻撃・守備の基本的G技術の考え方を学び、自分たちのチームの戦術を工夫する。	○ 実戦的なデータに基づき分析から自チームや相手チームを分析し、相手に応じて戦術を変える。 ○ 自分のチームの課題を解決するための練習方法を工夫する。 【グラウンドにおける活動】 - KJ法によって、チーム(個々)の抱えている課題を整理して課題達成を図る。 - チームで練習方法を工夫して、他の会員が担当したり、チームで戦術を決めるようにして、チーム力を高める。 【反省学習】 ① タクティクスアナリスト（戦術的分析） ② テクニシャン（技術的分析） ③ プラティフィブナー（練習計画立案）	○ クラスを越えて全チームで朝6時よりゲームを行う。 - 時間を 6時(前半)-20分(休憩)-5分(後半)とする。前半もよほどハーフタイムに時間管理に重点を置かないと後半のゲームを行なう。(17~22回目)	○ 自己実現を図る(Home & Away)ことで、毎回の対戦をふまえて、相手に応じて作戦を考えて2回目のゲームを行う。 ○ ここまでで実践した課題解決のプロセスを、リーグ戦のゲームの中でも実践しながら、さらにチーム力が高まるように工夫する。
【技術の学習】 - 本日の学習力 - カードの取り方 - 1タッチルーパー(相手とボールの間に体を入れる) - 守備のコントロール - ポータップ - ラップル - シュート	【技術の学習】 - 本日の学習力 - カードの取り方 - 1タッチルーパー(相手とボールの間に体を入れる) - 守備のコントロール - ポータップ - ラップル - シュート	【技術の学習】 - 本日の学習力 - カードの取り方 - 2人口との連携 - 守備の技術 - 守備の意識 - ゲームにおける3つの局面	【課題解決学習】 ゲームを通じて個人やチームの課題をみつけ、練習方法や戦術を工夫することによってチーム力を高める 【試合 ⇒ 課題発見(分析) ⇒ 練習方法や戦術の立案(計画) ⇒ 實践(実行)】	戦合 練習 分析 計画
技術の学習	技術の学習	技術の学習	チームでの課題解決学習	全チームモード
試しのゲーム (毎回違うメンバー)	ボーナルの工夫 (チームの設定 5時間目～)	KJ法 ロジックツリー 戦術 学習	チームビルディング 自チームの分析 相手チームの分析	リーグ戦
技術の発見・確認	技術の確認	技術の確認	技術の解決方法の導出・実行	課題解決の実践



ボードや分析シートを活用してチーム戦術を深めた

授業最初のチームミーティングの様子

4. 成果と課題

(1) 成果について

23 時間を確保して学習計画をたてたことで、じっくり学習を深めることができた。導入でたっぷりとサッカーのゲームを楽しみ、生徒が課題を発見するための時間を確保することで、生徒が課題を認識することができた。また、KJ 法やロジックツリーを活用したことで課題が整理され、後にアクションプランを導き出すためのチーム議論が活発に行われた。事後アンケートにおいては、85% の生徒が「KJ 法が課題の整理・発見に役に立った」と回答し、86%の生徒が「ロジックツリーが解決方法の導出に役に立った」と回答した。

単元前に行った事前アンケートでは、半数以上の生徒が「サッカーをプレイすることが嫌いである」と回答していたが、学習が進むにつれて徐々にサッカー好きになり、チーム活動を通じてチームプレイにのめり込んでいく様子が見て取れた。事後アンケートでは 92%の生徒が「楽しかった」と回答し、71%の生徒が「単元前よりもサッカーが好きになった」と回答した。生徒にとっての「楽しさ」が学習の原動力となって、生徒の主体性を引き出せたといえる。

(2) 課題について

大単元での課題解決学習によって学習効果が得られることはわかったが、大単元で行うためにはカリキュラムの工夫が必要である。一度、課題解決のプロセスの学習をしっかりと行うことで課題解決のスキルが高まるため、3 年間で系統立てたカリキュラムとなるよう工夫する必要がある。

「英語」

1. 4つの力との関連

英語科では、ペアワークやグループワークを通じて、英語での「コミュニケーション力」を育成することを心掛けている。また、リーディング教材などを通じ、他文化を理解し、自文化と比較することで「多文化理解力」を養い、ライティングやディスカッションを通して「多面的思考力」を育成している。2年生では学年全員が英語ディベートを定期的に行い、上記の力だけでなく、「課題解決力」にも資するようなカリキュラムとなっている。

2. 課題研究との関連

1、2年生の外国人教師とチームティーチングの授業、2年生の「即興型英語ディベート」の取り組みや「コミュニケーション英語」での英語サマリーの活動などを通じて英語発信力を育成している。英語科のカリキュラムで培われた発信力を用いて、英語で課題研究をまとめる生徒や、発表する生徒が増えている。どの学年においても、課題研究と関連する話題の英語の語いや文章を教材とする場合、SGHの活動と関連付けながら授業を進めている。

3. 本年度の取り組み

(1) SGH5期生(1年生)の取り組み

a コミュニケーション英語Iの授業

授業にはペアワークを多く取り入れている。毎回の授業に10分程度のスピーキングのトピックを示し、ペアでスピーキングすることで英語での発信力を育成をねらいとしている。また、本文読解をペアで行うことで、教えあい、学びあう光景が多く見られる。教科書の内容を理解した後は、多くの音読活動を行い、また自分の言葉で文章をサマリーする活動を取り入れることで、スピーキング力とライティング力を育成している。

b 大阪教育大学留学生との交流授業①

～英語で学ぶ日本型教育体験プログラム～

大阪教育大学の英語で学ぶ日本型教育体験プログラムの一環として、ジュネーブ大学、香港教育大学より10名の学生が本校を訪問し、本校の1年生の生徒全員と交流を行った。生徒5名に対し1名の留学生がグループに参加してもらい、グループ討議を行った。グループ討議①では、簡単な自己紹介の後、留学生の自文化の紹介をしてもらい、最後に「お互いの国の社会や文化について」の話し合いが行われた。スイスと香港のどちらの学生からも話が聞けるよう留学生にグループ移動をしてもらい、グループ討議②(自己紹介→文化紹介→「学生生活について」)を行った。授業の最後には、本校の生徒数名が、グループ討議②の日本とスイスもしくは香港の学生生活の違いや共通点について英語で発表を行った。

c 大阪教育大学留学生との交流授業②

～ドイツ人留学生によるドイツの教育と文化紹介～

大阪教育大学に短期留学にきていたドイツ人学生2名が各クラスに1時間ずつ訪問し、ドイツの教育制度と文化についてプレゼンテーションを行ってもらった。日本とは大きく異なるドイツの教育制度を、生徒は英語で理解しようとしていた。ドイツの高校には制服や部活がないことや高校で学ぶ教科の違いに驚いていた。長時間の英語によるプレゼンテーションを聞く機会もこれまでなかったため、生徒がどの程度理解できるのか懸念していたが、生徒は質問も積極的についていた。



(2) SGH5 期生（2年生）の取り組み

a コミュニケーション英語Ⅱの取り組み

2年生を対象に、「未知の事象に対し多角的に考え、英語で論理的に書けること」を目指すべき生徒の姿として授業実践を行なってきた。そのために使用した手法が、本校が目指す「4つの力」を高めるため開発された「三角ロジック」である。題材は生徒の身の回りのことだけでなく、社会が抱える問題や最新の科学技術など多岐に渡る題材を扱い、英語力に留まらない思考力や表現力を育成ができる TOEFL iBT の independent task を使用し、エッセイライティングに取り組ませた。実施方法は、一つのトピックに対し、賛成・反対の両方の意見を書き提出させるというものである。その際に、1 年次の課題研究で実践してきた「三角ロジック」の活用を取り入れた。与えられたトピックに対し、自身の意見を書き始める前に文構成の設計図を「三角ロジック」を活用し、作成することを前提とした。フィードバックのため、共通の間違いや改善点を授業で共有し、同トピックでのスピーキング活動や Peer-editing で、論理構成・表現方法・理由付けの共有を図った。実践成果として、次の三点があげられる。

- ①論理構造の一貫性の明確化の向上→自身で評価できる視点の育成
- ②エッセイ形式のパラグラフライティングの形成力の向上→文章構成力の育成
- ③意見と事実の書き分け=見分ける視点の育成→新テストに対応

生徒アンケートからも、「英文を書く機会がかなり増えた。」「自身の思っていない立場から物事を見ることができ、考えを深めることができた。」「表現の言い換え方が多様化した。」などと肯定的な意見が多数見られた。

b 即興型英語ディベートの取り組み

本校では平成 26 年度より、2 年生の英語表現Ⅱにおいて即興型英語ディベートを実践している。(株)ヒューマン・ブレーンの協力のもと、今年度は次の表のような日程と論題で年間 13 回実施した。

日程	論題
5/31	オリエンテーション
6/14	Homework should be abolished.
6/21	Domestic travel is better than traveling abroad for a school trip.
7/12	Fast food should be banned.
7/18	All students should be required to join a school club.
9/20	School lunches are better than bringing a lunch to school.
9/27	Zoos should be abolished.
10/25	The Japanese government should abolish nuclear plants.
11/8	Universities should be tuition-free.
11/22	Life in the countryside is better than life in the city.
12/13	予選① We should promote the use of electronic books and textbooks at schools. Junior high school students should be prohibited from using LINE. High school should outsource a coach for each school club.
12/16	予選② Driverless cars bring more benefit than harm. We should ban cosmetic surgery. Japan should abolish the death penalty.
12/19	決勝 We should promote the use of normal houses as hotels.

オリエンテーションを全体で行い、即興型英語ディベートについて学んだ後、4 人一チームでディベート実践を行った。クラス生徒を英語力に応じて 8 グループに分け、同一グループ内で対戦する形式をとった。授業の冒頭に初めて論題が発表され、そこから 15 分の準備時間の後ディベートを行う。

補助として、トピックに関連した単語シート（以下参照）が配布される。ディベートのジャッジは、（株）ヒューマン・ブレーンの講師が行い、最後の10分程度を使い各生徒にフィードバックを行う。

1学期には比較的身近な論題を用いてディベートを行い、英語ディベートに慣れることを重視した。最初は、スピーチ時間を余らせてしまう生徒が多くたが、1学期の終わりにはスピーチ時間が足りないと感じるまでに話せるようになっていた。また、途中での質問や、反駁などが積極的かつ効果的に発言できるようになっていった。2学期からは、より難しい論題を設定して行っていた。

最後には、校内大会を予選と決勝に分けて行った。決勝後に表彰式を行ったが、どの生徒も非常にうれしそうにしており、達成感がうかがえた。



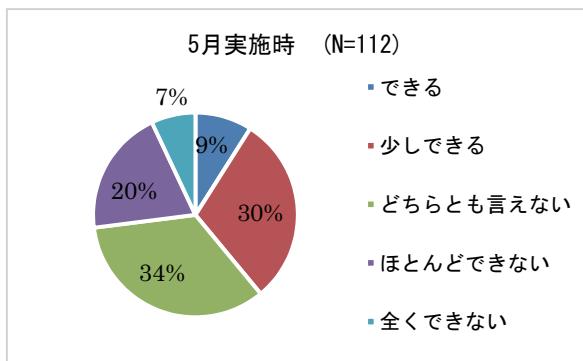
今年度も、夏季「PDA 全国高校即興型英語ディベート合宿・大会」に4名、冬季の「PDA 高校生即興型英語ディベート全国大会」に3名が参加した。夏季の大会においては、2名の生徒がベストディベーター賞を受賞し、チームとしても授業の部において3位になった。また、12月に、1年・2年の希望者7名が、大阪府立北野高等学校と大阪府立豊中高等学校の3校で合同練習会を行った。

c 即興型英語ディベートの授業における成果と課題

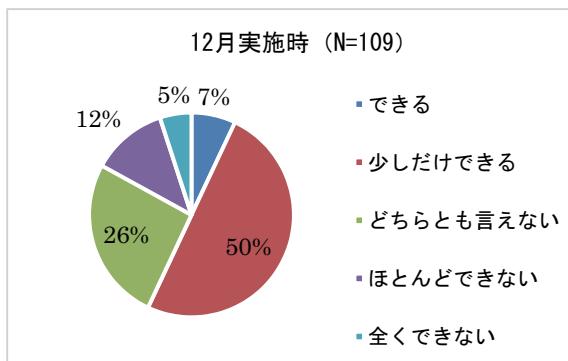
・アンケート調査からわかる意識の変容

5月（ディベート授業導入前）と12月（ディベート授業終了後）に、事前事後アンケートを行った。以下でその質問項目ごとに結果を考察する。

①「何かお題が与えられたときに、すぐに自分の意見を考えることができますか。」という問いに、5月時には「できる」・「少しできる」が39%（図III-7）であったのに対し、12月時には57%（図III-8）となっている。1年次に、授業でスピーキング活動を多く取り入れていたこともあり、もともとスピーキングにはなれていたと思われるが、ディベートを通して、スピーキングに対する自信の向上がみられた。



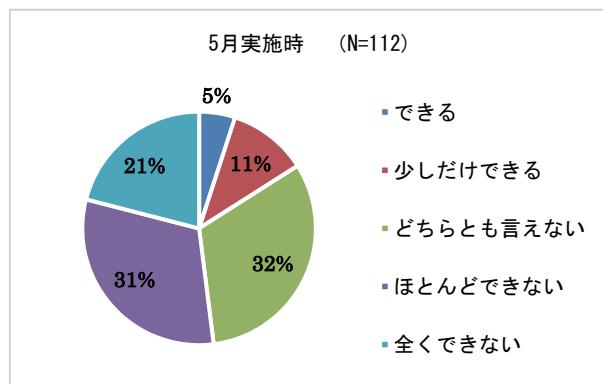
図III-7



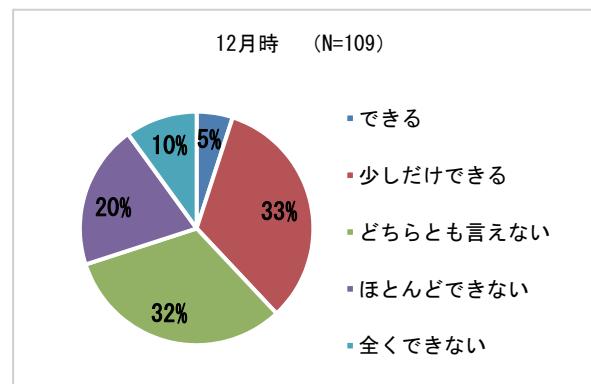
図III-8

②「与えられた「時事問題/グローバル課題」について、少し準備ができれば英語で1分間話せますか。」に対し、ディベート実施後には38%（図III-10）が「できる」・「少しだけできる」と回答した。5月時（図III-9）と比較すると、22ポイント上昇している。

また、「自分の興味のあること（映画、音楽、読書など）について、英語で話すことができますか。」という質問に対して、57%（5月時）と59%（12月時）、と変化が小さかったことからも併せて考察すると、難しいトピックに対するスピーキング力の向上や、そのことに対する自信が大幅に向上したと考えられる。



図III-9



図III-10

4. 成果と課題

今年も継続して、各学年で外国語運用力の育成に繋がる指導を心がけている。昨年までは「コミュニケーション力」「多文化理解力」を高める授業への取り組みを特に意識してきたが、今年は授業内のライティングやスピーキングの時間を増やすことにより、生徒の「多面的思考力」「課題解決力」も育まれていると考えている。2年生の英語ディベートの授業をより効果的にするためにも、1年生の英語の授業にミニディベートのような授業を展開したり、ディベートの授業で使われたトピックのパラグラフライティングを授業で展開するなど各教員が工夫を施している。今後は時事問題やグローバル課題についても、生徒に多面的に考え、意見などを英語で発信する力を育む指導が求められる。

「生命の倫理」

本授業は、「多面的に“いのち”を考えるグローバルリーダーの育成」という研究テーマの基礎になる学習として捉えている。前半は、いのちに関連した論題を提示し、その是非に関する基本的知識を学習してレポートにまとめる学習、後半は4人のチームによるディベートを実施している。

1. 「4つの力」および課題研究との関連

a 前半の学習と「4つの力」

単元前半は、主に「課題解決力」における『論理的思考力』『情報分析・収集力』を育む場として位置付けている。

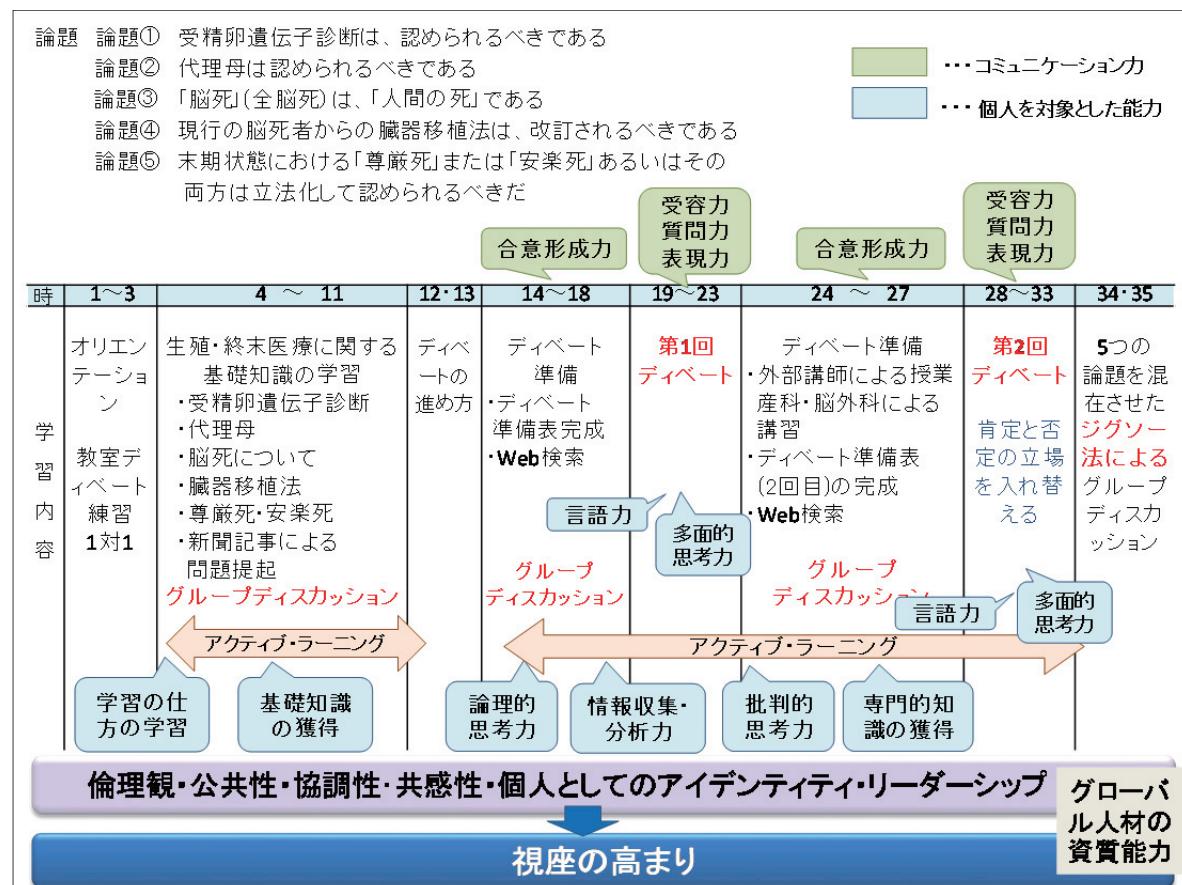
授業で学んだことをレポートとしてまとめることで、情報を分析する力を育むとともに、ものごとを論理的に組み立てる学習に力点を置いている。

b 後半の学習と「4つの力」

後半は、「課題解決力」「コミュニケーション力」「多文化理解力」「セルフマネジメント力」を育む場としている。ここでは、肯定・否定の立場を変えてディベートを行うことで、多面的に物事を見る目を育むとともに論理的思考力の向上をめざしている。また、論理矛盾を突きながら相手を説得することでコミュニケーション力の向上をねらいとしている。さらにディベートにおいて聴衆の前で発言する緊張感は、生徒のセルフマネジメント力を高める場ともなっている。

2. 生命の倫理の授業構造

授業の年間計画を図III-10に示す。論題は①～⑤とし、外部講師として医療に携わる専門家を招聘し直接、指導を受けている。



図III-10

3. 成果と課題

「生命の倫理」の学習では、「受精卵遺伝子診断」「代理母」「脳死は人の死か」「臓器移植法の改定」「尊厳死・安楽死」という5つのテーマについて探究することで、人間の生死に関する倫理的課題に迫っている。

前半の学習では、はじめの時間と比べてループリック（表III-1）の点数が「論点整理の内容（肯定的意見）2.1→4.7」「論点整理の内容（否定的意見）2.1→4.4」「表現方法（論点のまとめ方）3.0→4.3」と上がっている（いずれも**p<0.01）。昨年度と比較すると4回目の値が高くなっている。表現方法（論理性）のスコアは、経年で得点が高くなっている（表III-2）。

課題としては、授業時間が少ないことがあげられる。生徒たちは放課後や休み時間を使ってディベート準備表をまとめたり、情報を集めたりしていた。アクティブラーニングにより、生徒の負担が増えることがあるため、ここに対する配慮が必要となろう。

表III-1
生命の倫理 各論題の論点整理(レポート評価規準・基準)

		がんばろう 1	もう少しがんばろう 2	できている 3	よくできている 4
論題⑤	肯定に対する論点整理の内容	論点があいまいであり、わかりにくい、もしくは論点がずれている	1つの論点は、はっきりしている	はっきりとした2つの論点がある	3つ以上のはっきりした論点が示されている
	視点の多様性	1つの立場から論を展開している	2つの立場から論を展開している	3つの立場でから論を展開している	4つ以上の立場から論を展開している
	否定に対する論点整理の内容	論点があいまいであり、わかりにくい、もしくは論点がずれている	1つの論点は、はっきりしている	はっきりとした2つの論点がある	3つ以上のはっきりした論点が示されている
	視点の多様性	1つの立場から論を展開している	2つの立場から論を展開している	3つの立場から論を展開している	4つ以上の立場から論を展開している
	表現方法	おおむね文章の羅列で表現されており、論点がはっきりしない	ポイントのみで説明が十分ではない、または、文章表現だが論定を整理しようとしている	論点項目が整理され、説明がある。	しっかりとした論点の項目が整理され、その後にわかりやすく説明されている
	丁寧さ	丁寧ではなく読みづらいやつらい	ふつうである	丁寧に記されている	読みやすく配置され、なおかつ丁寧に記されている

表III-2
生命の倫理に関するレポート内容の変容

2017年度

ループリック項目	1回目(平均)	4回目(平均)	検定(t)
論点整理の内容(肯定的意見)	2.3	2.8	**
論点整理の内容(否定的意見)	2.2	2.6	**
表現方法(論点のまとめ方)	1.9	2.6	**

* 数値が高い方が良く出来ていることを示す

*:P<0.05 **:P<0.01

2018年度

ループリック項目	1回目(平均)	4回目(平均)	検定(t)
論点整理の内容(肯定的意見)	2.4	3.8	**
論点整理の内容(否定的意見)	2.6	3.8	**
表現方法(論点のまとめ方)	3.3	3.8	**

* 数値が高い方が良く出来ていることを示す

*:P<0.05 **:P<0.01

2019年度

ループリック項目	1回目(平均)	4回目(平均)	検定(t)
論点整理の内容(肯定的意見)	2.1	4.7	**
論点整理の内容(否定的意見)	2.1	4.4	**
表現方法(論点のまとめ方)	3.0	4.3	**

* 数値が高い方が良く出来ていることを示す

*:P<0.05 **:P<0.01

「公共と経済」

1. 4つの力との関連

高校生となって学んでいく必修科目「現代社会」と学校設定教科「公共と経済」は、われわれが生きる社会の仕組みやグローバル化する世界の中で日本の課題を知るという入門的要素を有する教科である。ますます複雑化する社会と環境問題といった喫緊の課題に無関心ではいられない現代において、本校の SGH での学びは、まさしく生徒の生きる力を育成させるものである。「現代社会」と「公共と経済」の役割は、こうした本校のカリキュラムの中で、課題解決能力とセルフマネジメント能力の涵養について大きな力を発揮することができる。

2. 課題研究との関連

本校の SGH の活動では、研究や調査の結果を論理的に考察・整理し、論文やポスターとしてアウトプットする能力が求められている。昨年度と同様に本科目では、多面的・論理的な思考力、課題に対する疑問や不明な点について積極的に理解しようとする力を育成するために、情報収集・分析力を高め、論文を書く技能を早く習得できるよう、授業を計画した。

まず、さまざまな疑問点や不明点を調べる時に、使える情報源とそうでない情報源、信用に値する資料とそうでない資料の見分け方が大切である。しかし、それらの違いを説明することは、そう容易なことではない。また、収集した情報や資料をまとめる力もそう早くから身に付く訳ではない。

3. 本年度の取り組み

本年度は、(1) 情報収集と活用、引用や転載の方法の指導「平野校舎 SGH 課題研究指導」、(2) 取り組みやすい参考資料を示して対象に興味をもってもらう「家族と共有する戦後日本社会の記憶」、(3) 形式的な論文としてまとめられるシートを配付した宿題「“戦後の日本経済のあゆみ” 課題シート」という取り組みを行った。以下、その実践報告を行う。

(1) 平野校舎 SGH 課題研究指導

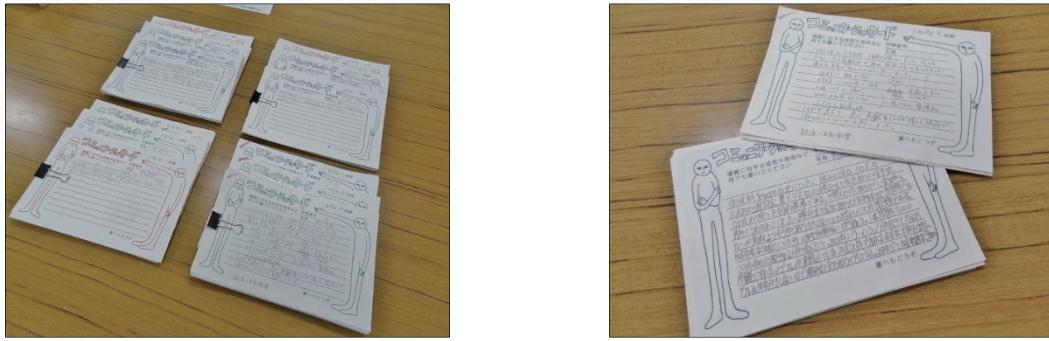
研究を指導する際の課題の 1 つに、どのような情報（資料）が有効なのか（使えるのか）についてのどう指導すればよいかということと、もう 1 つは、研究・調査・分析・整理・表現するという基本姿勢をどのように指導していくべきか、という 2 つに絞られる。本年度は、1 年生には、情報収集と活用の方法の入門編にあたる「情報の収集および活用の方法—研究・調査のための情報収集—」（6 月 6 日）を、2 年生には、論文の書き方の基礎を示した「高校生のための学術論文の書き方—構成の手法と表現方法—」（2 月 20 日）を、それぞれ講演形式で指導した。

実際に生徒から「ネット上において、どの情報が信頼できるのか分からず」あるいは「引用の方法がよく分からない」などといった質問が多く寄せられていたことと、課題の添削において情報の収集や活用、論文の体裁について十分な指導を行う必要性があったためである。分かりやすく理解してもらうために、実例を示す工夫を心掛けた。指導後は、生徒が注釈の付け方や引用のルールについて少しずつ上達していく過程が見え始め、ポスターや口頭発表でのスライドにおいても体裁が整ったものに変わっていた。

(2) 家族と共有する戦後日本社会の記憶

公民科の分野において、戦後の日本経済とその社会という単元は、生徒の親族と当時の記憶を共有しやすい。そして、この時代の資料としては、映像という記録媒体を大いに活用することが可能である。戦後日本社会という敗戦と復興、高度経済成長、バブル景気とその崩壊、失われた 10 年、そして現在という時代の流れを映像と絡めて授業を進めた。映像は、日本の戦争と敗戦に関するものや、

東海道新幹線の開通と東京オリンピックの開催、バブル経済の実状といったものである。映像の鑑賞中は、コメントカードを配付して時代から感じ取ったことを自由に記述してもらうようにした（図III-11）。



図III-11

（3）課題研究「戦後の日本経済のあゆみ」

昨年度に引き続いだ「戦後の日本経済のあゆみ」と題する課題研究を行った。すでに情報収集については（1）で述べた通り指導しているので、生徒自らが自由に時代を選んで自由に情報を収集してまとめてもらうことにしたが、調査を始める導入として簡単な情報整理シートを作成しておいた（図III-12）。記述方法の具体的な指導として、どの項目にどの内容をどの程度書けばよいかという指針を示している（図III-13）。課題については、それぞれの生徒が考えた方法と対象に接して行われている。

（2）で示したように、生徒の親世代や祖父母世代の聞き取り調査から、多くのユニークな情報が引き出せており、調査の内容に厚みが加えられているものが散見された。また、図や表の内容を巧みに活用している生徒や、課題のテーマに関係する場所に赴いて調査する生徒も見られた。

（図III-12）

（図III-13）

4. 成果と課題

成果は、本年度で2度目に行う実践もあり、昨年度の反省をフィードバックできたことで、課題解決についての知識や力量を伸ばせたことと、教師側からの発問・説明や書籍などのみならず、聞き取り調査という手段を実践する経験も培えた点である。今後も新聞やテレビという情報媒体から有用なものを引き出せる力をさらに養うことと、映像のような記録媒体を上手く使いながら、SGHのカリキュラムに十分に通用できる論理的かつ批判的な姿勢による学びと、情報をよく吟味し表現する力を育成していきたい。